

ながさき東そのぎ子どもの村小学校
ながさき東そのぎ子どもの村中学校

2021 年度
現 状 と 課 題
— 学 校 評 価 に 代 え て —

2022 年 3 月 31 日

学校法人きのくに子どもの村学園
ながさき東そのぎ子どもの村小学校・中学校

も く じ

1. 沿 革
2. 施設の概要
3. 学校づくりの理念と実際
4. 学校の現状
5. 今後の課題

付記

1. 沿 革

ながさき東そのぎ子どもの村小学校は 2018 年 9 月に、学校法人きのくに子どもの村学園が長崎県知事から設置認可を受け、翌年 4 月に長崎県東彼杵郡東彼杵町大音琴郷 1621 番地に開校した。施設は、2015 年度に廃校手続きがなされた東彼杵町立音琴小学校の校地および校舎を東彼杵町から無償貸与されたものである。

開校時の子どもの数は、小学校第 1～6 学年の 34 人である。

開校と同時に寄宿舎 1 棟を新築し、全児童の 50 パーセントが共同生活している。

2020 年 4 月 1 日、同施設内にながさき東そのぎ子どもの村中学校を開校した。子どもはながさき東そのぎ子どもの村小学校の卒業生で、第 1 学年のみ 6 人である。

2020 年 2 月から全国的に新型コロナウイルス感染症が広がりを見せ、3 月 1 日から 5 月 31 日まで、臨時休業の措置をとった。そのため、2020 年度は 6 月 1 日を始業日とした。

2. 施設 の 概 要

- | | | | |
|--------|---------|-------------------------|----------|
| 1. 校 地 | グラウンドほか | 5, 0 2 3 m ² | (東彼杵町所有) |
| 2. 校 舎 | (1 棟) | 1, 5 7 6 m ² | (東彼杵町所有) |
| 3. 体育館 | (1 棟) | 3 4 8 m ² | (東彼杵町所有) |
| 4. 寄宿舎 | (1 棟) | 4 4 1 m ² | (学校法人所有) |

校舎、体育館、寄宿舎ともに耐震基準をクリアしている。校舎は通常の公立学校の設計によるもので、2 階はオープンプランである。

3 階の普通教室を中学校とする。

3. 学 校 づ くり の 理 念 と 実 際

本校の教育理念は、学校法人の経営するきのくに子どもの村小学校及び中学校のそれとまったく同一であり、A. S. ニールおよびジョン・デューイの教育理論を基礎にして目標とすべき子ども像と、その目的追求のための基本原則、そして具体的な教育活動の形態を以下のように設定している。

(1) 目標とする子ども像

現代の学校教育は、知識と技能の伝達に主たる目標が置かれ、子どもたちの人格の調和的あるいは全面的な発達がおろそかにされているきらいがある。そのためにしばしばメディアをにぎわせるような歪んだパーソナリティの人間を育てる危険がひそんでいる。また、既成の知識等の伝達に異常な重きが置かれているために、子ども自身が創意工夫をはたらかせて発見したり創造したりする力を十分に育てていないがたい。その結果、OECD の国際比較調査に見られるように、創造的に考える力の育成という面で立ち遅れている。

以上の批判的見地に立つて本学園では、子どもたちが感情、知性、社会性（人間関係）のいずれの面においても自由な子ども（人間）へと育つのを援助したいと考えている。自由な子どもとは、具体的には次のような子どもである。

A. 感情面の自由

無意識の解放……内面の不安、緊張、自己否定感にとらわれていない。
意識面の自由……自己意識が明瞭で、自信や生きる喜びに満ちている。

B. 知性の自由

創造的思考………実際の問題に敏感で、仮説を立て、行動で検証する。
多方面の興味………多くの事象に好奇心旺盛で、情報収集の意欲を持つ。

C. 人間関係の自由

自己の確立………強い自我を持ち自己主張ができる。
人間関係の術………まわりの人々と目的を共有し役割分担ができる。

(2) 基本原則

教師による管理にかたより、個人差を軽視し、既成の知識や技能の伝達を主要業務とする従来の方式では上記の自由な子どもの発達に期待できない。われわれは、下記の実行原則をできるだけ徹底し、かつこれらの原則をバラバラにではなく、むしろ統合的に実行することをめざす。

A. 自己決定の原則

ニールのサマーヒルの実践をモデルにしている。子ども自身が学習、共同生活、およびその他の諸活動について話し合い、それをもとに決定するのを大事にする。あるいは大人から提示された複数の選択肢から選ぶ。その学習等の評価に子どもが参加する。

この際、教師はふつうの学校におけるよりもはるかに周到な準備や下調べが要求される。子どもの自由を尊重する教師は楽ができるわけではない。むしろ子どもの自由と教師の忙しさは比例するのだ。

B. 個性化の原則

画一主義の一斉教授方式を避け、個人差を尊重して学習の多様化を図る。たんなる学習の個別化ではなく、むしろ興味・関心・到達度の違いを認め、同時並行的に質やレベルの違いの学習の機会を多くする。また、個性尊重というと、とすれば「一人学習」と混同されがちであるが、個性尊重と集団活動は対立するものではなくて、むしろ生き生きとした集団の中でこそ個性は輝きを増す。

C. 体験学習の原則

教科書や問題集を中心にした既成の知識の伝達や機械的な反復学習ではなく、子ども自身が実際的な問題や課題に取り組み、知識や技能を創造するタイプの学習をおこなう。手や体をつかうけれども、何よりも頭をつかう知的探求という性格の学習形態である。デューイの「活動的な仕事」の理論を援用している。

(3) 学習等の形態と学級編制

上記の自己決定、個性尊重、体験学習の3原則は、それぞれが重視されると同時に、互いに関連しあって学習の形態を形成し、カリキュラムと実際の教育活動を組織する。

A. プロジェクト

3原則が調和的に実行される総合学習の形態である。子どもたちは、個人差や個性を大事にされつつ、自発的に実際的な生活にそくしたプロジェクトに取り組んで、統合的に多方面の発達をはかる。出発点となる活動のテーマはデューイのいう「基本的な社会生活」、つまり衣食住またはそれに類する活動で、子どもたちの日常生活から題材をとって、原則として1年間を通じて追究する。1週間に14時間がこれにあてられる。

B. 基礎学習

自己決定と個性尊重の原則が前面に出て、抽象的な題材もつかわれる形態である。ただし、できるだけプロジェクトの活動から題材をとり、また得られた知識や技能をプロジェクトで活用する。小学校では「ことば」と「かず」の2領域があり、国語と算数に対応するが、その中でもっとも基礎的な内容を扱う。週8時間である。

C. 個別学習

個性化と体験の原則は十分に維持されつつ、大人の指導や助言がほかの形態よりも多用される時間である。得意な領域をさらに伸ばす場合や、不得手な課題の復習などにあてられる。ただし、小学校ではプロジェクトの中に組み込まれている。

D. 自由選択

グループ活動である。小学校では主として図画工作、音楽、体育の内容を複数用意して子どもが1学期単位で選択する。週6時間。ただし6学年だけ週1時間の英語の時間を設ける。

E. ミーティング

子どもの自己決定を重視する学校では必然的に話し合いが不可欠になる。時間割上は週1時間であるが、放課後や諸教科の中でも寮生活の中でも話し合いは頻繁に

開かれ、個人として、また共同生活の一員として成長するのを促す上でとても重要な役割を果たしている。

F. 学級編制

クラスは完全縦割り編制をとっている。つまり小学校の場合、どのクラスにも1学年から6学年までの子どもが属している。子どもたちは、テーマを異にする複数のクラスの活動や担任を見極めてみずから選択する。この学校で最も重要な教育活動であるプロジェクトでどのテーマを追求するかは、学年や年齢よりも優先されるべき要因であるからだ。

小学校の基礎学習もこの異年齢グループでおこなわれる。1学年の定員が12名と少なく、各クラスの人数も全部で24人を超えることはない上に、それぞれに2人以上の大人を配置するティームティーチング方式がこれを可能にしている。

4. 学校の現状

(1) 学校の組織

A. 役員会

本校を設置経営するのは、学校法人きのくに子どもの村学園（和歌山県橋本市彦谷51、1992年3月、和歌山県知事より認可）である。理事は、堀真一郎理事長を含めて9名、監事2名、評議員は19名であり、いずれも欠員はない。

B. 教職員（2021年5月1日現在）

本務職員……教員：8名（うち1名が副校長）

職員：事務職員1名、養護教諭1名、寮職員2名

その他職員…学校医、学校歯科医、学校薬剤師 各1名

C. 子ども（2021年5月1日現在）

小学校……56名

中学校……9名

D. 保護者会

今年度は、新型コロナウイルス感染症が拡大したため、保護者間の交流をはかることができず、次年度に会の設立を計画している。

(2) 施設および設備

前述のように本校は元東彼杵町立音琴小学校の校舎の貸与を受けて発足した学校

である。開校以来、校舎にはまったく変更はない。校舎、体育館ともに鉄筋コンクリート建てで、耐震化の基準をクリアしている。

内部は2階部分がオープンプラン方式で設計されていて、小学校のプロジェクトの教室として使用している。3階の普通教室を中学校の教室とし、図書室、特別教室は小学校と共用している。

1階の旧保健室は地域に開放し、災害等の場合は長指定の避難場所として活用している。

寮は木造2階建てで、収容能力は最大60名である。各部屋の定員は2-8名で、個室はない。2名の専任職員が生活面のケアをおこなっている。子どもは金曜の放課後に帰宅して月曜日の朝11時までに登校する。

グラウンドは広いとはいえないが、古い遊具を町の配慮で撤去してもらい、現状は不便なく利用している。地域の要望により、冬季は定期的に薬品をまいて風による飛散防止を行っている。

後述するように、校具、教具、図書などの備品は必ずしも豊富とはいえない。しかも体験学習中心の教育を続けるには、消耗品類も多く必要になる。今のところ必要最低限の校具等は何とか用意されているが、今後の整備に工夫が必要である。

(3) 財政状況

学校法人きのくに子どもの村学園は、現在、和歌山県、福井県、山梨県、福岡県（北九州市）、長崎県で、小学校5校、中学校5校、高等専修学校1校を経営しており、さらに英国スコットランドに元私立学校を研修宿泊施設として有している。全児童生徒数が600人程度の小規模な学園であるが、さいわい借入金ゼロの経営を続けてきた。

なお、学校法人の方針により専任職員の給与は、年齢、職種、資格を問わず、基本給が全員同額である。

(4) 教育活動

A. プロジェクト

2021年度の小学校のクラス編成は以下のとおりである。各クラスの名前は、それぞれのプロジェクト活動のテーマから設定されている。

<小学校>

トンカチ工房……主な活動＝木工、小規模な建物の建築、おもちゃづくり

琴の音ファーム……米づくり、野菜づくり、料理

まんぷく……南蛮料理などの食の探究を通して、自分たちに生活を豊かにする

<中学校>

和華蘭館「ねごと」…「道」をテーマにした地域研究

各クラスは複数担任制で、予想されるおおよその活動内容を年度初めに子どもにア
ナウンスし、子どもたちはこれ聞いて自分の属するクラスを選択する。中学生は 9
名のため、本年度はプロジェクトを 1 つとした。

クラスのメンバーが確定すると年間計画を策定し、子どもたちの感情、知性、社会
性の各側面の発達の予想を立て、具体的な学習計画が出来上がる。これは職員全員の
会議で検討され修正される。

また、年度途中でクラスの様子が報告され、相互に前向きな批判とアドバイスをお
こなう。年度末には 1 年間の経過が報告され、目的やねらいが達成されたかどうかの
評価をおこない、次年度の計画に反映させる。

2021 年度については、掲げていた目標をおおむね達成し、当初設定していた成果が
得られたと思われる。

B. 基礎学習

基礎学習はプロジェクトのクラスがそのまま基礎集団となって同一時間帯におこな
われ、3 人以上の大人が担当する。おおむね学年相当の手作り学習材が用意される。
教科書どおりに授業を進めることはほとんどない。学習材のほとんどが手作りである
理由は、プロジェクトや普段の生活から題材をとるからである。そのぶん教師は忙し
いが、与えられた教材を決められた手順どおりに教えるよりも、内容と方法を子ども
の実態にかんがみながら工夫できるのは、教師にとって大きな喜びとなっている。ま
た子どもの学習モチベーションを高める上でも好都合であるし、個人差にもきめ細か
く対応できる。

なお、本校には通常の通知簿や成績表の類のものはない。その代わりに一人ひとり
の子ども様子は各学期の終わりに「生活と学習の記録」として保護者に報告される。
これは教科の成績というよりも、感情、知性、社会性の側面ごとに子どもの成長の様
子を自由記述式で記録したものである。

C. 自由選択

自由選択は、きのくに子どもの村では 1 学期単位で 6 - 8 個の活動から選択できる。
選択肢を増やすために、外部講師を活用した。

D. ミーティング

前述のように、子ども集団が自発的にひとつの共同のプロジェクトに取り組もうと
するとき、また共同生活をより快適なものにするためには、話し合いは不可欠である。
心を通い合わせる仲間として、目標を共有し、役割を分担して大きな仕事に挑戦する
ためには、大小さまざまな形のミーティングを開かなくてはならない。子どもたちの
話し合いのない体験学習は、教師主導のたんなる肉体作業におちいる危険がある。な

がさき東そのぎ子どもの村小学校及び中学校では、毎週月曜日に全校集會が開かれ、
行事の計画、もめごとの処理、さまざまな社会問題についての議論などをおこなう。

このほか、各クラスでも、寮でもミーティングはひんぱんにおこなわれ、「自分たち
自身の生きかたをする自由」（ニイル）の習得のためのよい機会となっている。

さらに、ミーティングは別の教育的意義をもっている。さまざまな問題に気づき、
これをことばで明瞭に整理して、自分の考えをまとめ、他に伝える力をつけるという
意味で、子どもたちの本来の意味での言語能力を伸ばすためのよい経験となっている。
漢字ドリルよりはるかに国語の学習になっているのだ。

ただし、子どもたちの中にミーティングが好きではないという声が聞かれることに
は注意を払う必要がある。その原因は、迷惑行為や約束違反の行動をした者の扱いな
どで時間がかかるケースが少なくないことにある。「楽しい議題のときは長く、いやな
議題のときは短く要領よく」というのが望ましい。大人の参加の仕方（発言の仕方とタ
イミング、議長へのサポートなど）が問われるところである。

E. 見学、修学旅行、海外体験学習など

ながさき東そのぎ子どもの村小学校及び中学校は、きのくに子どもの村学園の小中
高とならんで、日本で最も学外へ出かける機会の多い学校である。プロジェクト学習
の充実のためには、クラス単位の日帰りの見学は欠かせない。また、宿泊を伴うクラ
ス旅行に出かけ、プロジェクトにかんする情報を得る。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、実施に制限があった。学校法
人がスコットランドに所有する施設（キルクハニティ子どもの村）への機会は実現し
なかった。

修学旅行は、6 年生 8 名が和歌山、大阪、奈良、福岡に出かけたが、中学生は 1・
2 年生が 9 名で 3 年生がいなかったので実施しなかった。

本校の修学旅行には、以下のようなほかでは見られない特長がある。

1. 子どもたちが計画を立てる。

参加者がひんぱんに集まって、時間をかけて資料を収集し、旅程を立て、こま
かく費用の計算をする。さらに宿泊する施設やフェリーの予約をとることも多い。

2. 旅行業者に頼らない。

計画の立案だけでなく、移動のほとんど職員がマイクロバスなどを運転して
おこなう。したがって中身の充実からは考えられない少ない経費ですむ。一人当
たり 3 万円以内である。

子どもが知恵をしばって計画を立て、さまざまな情報を身につけ、仲間と夢を
共有してその実現に向かって共に力を合わせるという意味において、修学旅行は
本校の学習の中心であるプロジェクトのひとつの形態であるともいえよう。

F. 学校行事

本校の学校行事はあまり多くない。出かけることが多いので、最近普通の遠足はほとんどおこなわれない。運動会はあるが、事前の練習にはほとんど時間をかけない。子どもと保護者と地域住民、そして卒業生などの親睦を目的とするイベントになっている。入学式、卒業式などは「入学を祝う会」「卒業を祝う会」と呼ばれ、それぞれに委員会ができて計画を立て、実際の進行も子どもがおこなう。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、保護者の参加を制限し、地域や来賓の列席については断念せざるを得なかった。

G. 寮生活

現在、全校の子どもの5割が寮で生活している。いちばん遠くから来ているのは福岡県からである。寮生の多くは金曜日の放課後に自宅に帰り、月曜日に帰校する（「週末帰宅の子ども」）。月曜日は11時に授業が始まる。

寮の中で子どもたちは思い思いに過ごしているが、ときには共同生活にありがちなトラブル（けんか、ものの貸し借り、持ち物の紛失など）が起きることもあり、必要に応じて全寮ミーティングが開かれる。お楽しみ会、誕生会、クリスマス・パーティなどは子どもたちが自発的に計画して実行する。常駐の寮職員は2名である。

小学生にとって寮生活は重荷ではないかという懸念が示されることがある。とくにホームシックを心配する人は少なくない。しかし、われわれの経験では、低年齢の子どものほうがかえって早くホームシックを乗り越えていく。もっともホームシックそのものは、決して否定的に見られるべきことではない。どの子どももほどほどにホームシックになるのがむしろ自然かもしれない。いずれにしても子どもは、大人が心配するほどはホームシックに悩みはしない。じっさい、寮生の大半が寮生活は楽しいと答えている。

5. 今後の課題

(1) 教育活動の深まり

小学校開校2年、中学校開校1年ではあるが、プロジェクトを中心とする教育計画はほぼ順調だったと考えられる。財政規模は小さく、施設も設備も十分とはいえないが、小規模校のよさを生かした教育活動が展開されている。しかし、教育面の改善にはこれでよいというゴールはない。いっそうの研鑽と実験的な試みを続けたい。そのためには、教員の国内、海外、校内など各種の研修、相互の実践の検討、保護者等への啓発活動、思いを同じくする姉妹校その他との交流などを怠ってはならない。

教職員の研修にかんしては、現在のところほかの学校、とくに公立校に比べれば多額の助成をおこなっているが、今後ともその拡充を図りたい。

(2) 啓発活動と横のつながり

学校法人きのくに子どもの村学園は、これまで日本における「オルタナティブ・スクール」の代表的なモデルとしての地位を占めてきた。マスコミで取り上げられることも多く、見学者も後を絶たない。見学者は国内に限らず、韓国をはじめ、海外からも注目を集めている。学園長の著作のうち2冊が韓国語に翻訳されている。学園ではこうした内外からの関心に応じて、さまざまな形で自分たちの教育理念や実績・実情について発信してきた。また、教育のあり方を考えるシンポジウムも毎年おこなっていて、時には韓国、イギリス、アメリカ、インドからも教師や高校生を招いて討論をしたり提案したりしている。

日本の学校教育の諸種の問題点がまだ解決の方向に向かう気配が見られない今日、学園の果たすべき役割は大きい。従来の方式とは違うやり方が存在するという、そして、それがしかるべき成果を挙げていることを、今後とも精力的に発信していきたい。そのためにも、いくつかの新しい学校との連携を深め、具体的な教育実践を通じて教育改革の必要性と可能性をアピールしたい。とりわけ以下の学校との横のつながりは大切に育てたいものである。

学園の設置する学校

きのくに子どもの村小学校
きのくに子どもの村中学校
きのくに国際高等専修学校
かつやま子どもの村小学校
かつやま子どもの村中学校
北九州子どもの村小学校
北九州子どもの村中学校
南アルプス子どもの村小学校
南アルプス子どもの村中学校
ながさき東そのぎ子どもの村小学校・中学校
キルクハニティ子どもの村スクール(スコットランド)

(3) 施設と財政

ながさき東そのぎ子どもの村小学校の物理的環境、つまり施設は決して十分とはいえない。備品類にしても買い入れたいものは多い。学校の車両はすべて中古である。

しかし、あえて小学校では各学年の定員が12名、中学校では各学年の定員が15名の学校として発足した以上、ある程度の不便さはやむをえない。むしろ十分とはいえない施設を有効かつ創造的に活用し、人材をととのえれば相当の教育成果をあげうることもはつきりしてきた。

財政状態は、前記のように決して余裕があるとはいえない。また、子どもの数の急激な増加も期待しにくい。しかし出版物、学校通信や、サマースクール、市民向け手づくり教室などの機会を通じて、本校のよさをアピールし続けたい。

付 記

本稿では、通常の学校評価に添付される学外者による評価がない。それはこの学校が一般的な普通の学校とは理念と基本方針そして実践の原則を大きく異にしたユニークな学校であるというところにある。その理念と方針を十分に理解しない人がこれを評価するのは容易ではない。これを強行すれば、無用の誤解や勘違いに陥る懸念が生じる。学園の哲学と実践方式を十分に理解する人が評価をすれば、それは身内による評価とみなされる可能性がある。

以上の理由により、今年度も他者による評価をおこなわないこととし、次年度以降の課題としたい。